

# 「大谷石文化花開く町・西根」

宇都宮伝統文化連絡協議会 柏村 祐司

徳次郎町の西部、男抱山麓おとだきやまに西根という戸数二十戸程の小集落がある。集落を貫く旧国道二九三号の両側には、石造りの民家が連なり特異な集落景観をなしている。

宇都宮大学等の調査によれば、西根の建造物の総数は九十九棟で、このうち石造建造物は六十二棟という。建造物の中の石造建造物の占める割合は実に六三%となる。これほど石造建築占有率が高い集落は珍しい。

西根における石造建築物の石材は、通称「大谷石」と称されるが、詳しくいえば徳次郎石と大谷石とからなる。徳次



石造建造物群

郎石は、西根の西方、男抱山中に産するもので、一説によれば享保の頃(七二六―三五)から採掘されたという。石の特徴としては「ミン」と呼ばれる黒茶色をした軟らかな部分が多く、均質で細工に適している。しかし大谷石に比べると埋蔵量が少なく、昭和五十年代には採掘が途絶えた。

このように西根の石造建造物は、徳次郎石と大谷石の両方の石材が用いられたところに特徴がある。時代的に見ると、徳次郎石は江戸時代から大正期頃までのもの、大谷石は昭和期以降のものが多い。

西根の石造建造物が注目されるのは、蔵をはじめ納屋、母屋、塀、祠等と種類が多いこと、石屋根の建造物が多いこと、石蔵の二階窓等に細かな細工物が見られること、貼り石構法によるもの・積み石構法によるもの等時代による工法の違いの建物が見られること等、実に多様な石造建造物

が見られることにある。

一般に石造建造物といえ、圧倒的に蔵が多い。貴重品を火災から守るためであるが、西根には母屋も石造りという家がある。昭和五十年代の初めには二棟あり、どちらも積み石工法の石屋根であった。一棟は二階造り、一棟は平屋造りで、平屋造りの家では、母屋のほかに蔵、納屋等全てが石造りという石造建造物に徹底した家であった。残念だが平屋建てはその後解体され、二階建ては現存するが瓦屋根に改修された。

石屋根は凹形と凸形の石瓦を交互に葺いたものである。一枚の瓦は約三十センチもあり、屋根全体では何トンもの重さになる。造りも堅牢となり、建築費用もかかる。「石屋根を造ると身上が傾く」といわれるように裕福な家でないと造れないものであった。

細かな細工では、石蔵の二階の窓によく見られる。あたかも木造のような庇の造りを

施し、戸の表面に恵比寿大黒天像を浮彫したものもある。きめ細かな徳次郎石ならではの装飾である。

貼り石構法・積み石構法の違いは、石の運搬方法の相違に関係する。明治三十年代初頭に材木町・大谷および戸祭・新里間に入車軌道が開通すると五十石ごとういし(幅一尺・長さ三尺・厚さ五寸)等重量物の運搬が可能になり、それまでの貼り石構法に代わって積み石構法が主体となった。

このような西根の多様な石造建造物を促した背景には、徳次郎石や大谷石の採掘場が近くにあったことや明治初期に大きな火災があったことがある。その他住民の経済力の高さや、徳次郎町は優秀な加工専門の石工を輩出したが、その存在も見逃せない。西根はまさに「大谷石文化」の花開く町といつても過言ではない。



装飾を施した窓枠